

「重なり志向」の日本文化

石井隆之

0. はじめに

日本文化の特徴を一般化する試みは、これまでいろいろとなされてきた。例えば、韓国の学者によって、「縮み志向」や「切り志向」が論じられたこともある。¹

また、一般論として、日本文化は「間の文化」であるとか、「手の文化」であるとか、言われている。²

更に、日本の伝統文化は、左重視の傾向があることも間違いない事実であろう。陰陽の発想が大きく影響を与えているという考えも存在する。³

以上の例は、日本文化を一般化するキーワードの例としては、ほんの一部であるが、日本文化の特徴を概観できるということに関し、それなりの理由を提示できるものであろう。

本稿は、全く別の角度から、日本文化の特徴を一般化できるキーコンセプトとして、新たな提案をすることを目的とする。具体的には、「日本文化は『重なり志向』である」ということを、具体例を挙げつつ論じ、その『重なり』というコンセプトの説明力を証明し、何故『重なり』が重視されるのかという点にも触れることを目指す。

本稿で述べる『重なり』とは、「重なる」ということから連想可能な全ての事象を指すのであるが、日本文化が『重なり志向』である可能性を示唆している2つの事象を挙げておこう。

(1) a. 神社での拍手

b. お正月の鏡餅

(1a)に関し、神社では通常2回拍手をするのであるが、これは、拍手という「音」の重なりを意味する。(1b)では、言うまでもなく、お餅という「物」の重なりの事例である。⁴

第1章では、『重なり』という現象が、日本文化の諸側面に見られることを概観し、第2章では、『重なり』という現象から派生した概念を用いると、更に、日本文化を説明できる点を示し、第3章では、『重なり』の抽象化の極致と言える日本文化の重層性を、3つの視点から述べる。第4章で、『重なり』を重視する理由に触れつつ、全体をまとめることにする。

1. 日本文化の諸相と「重なり」

日本文化の色々な側面に「重なり」が見られる。この章では、様々な側面に見られる重なり現象を考察し、日本文化は「重なり志向」であると結論付けることが可能であるということを実証する。

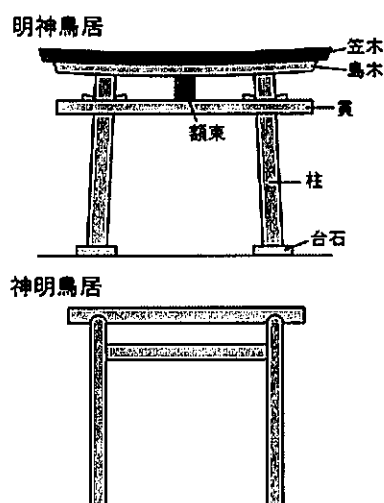
1-1 日本の建築と「重なり」

日本の建築には、いろいろな重なり現象が見られる。建築物の屋根に瓦が重ねられているが、これは、日本に限らず世界中いたるところで見受けられる。この節では、日本文化に限られる建築上の重なりを概観することにする。

1-1-1 鳥居

まず、鳥居の存在が挙げられる。2本の柱で門を作ること自体は、「重なり」を象徴することはないが、明神鳥居を例にとれば、2層の水平材とし、上層の笠木(かさぎ)に接して島木(しまぎ)を渡す点、さらに、その下に貫(ぬき)を入れて柱を固定する形式が、正に鳥居が「重なり」を代表する門であることが分かる。

(2) 鳥居の構造



鳥居の形状だけでなく、機能も重なりと関係がある。鳥居は、俗なる世界と聖なる世界の重なる地点において、その二世界を分けている。

なお、鳥居は1基、2基と数えるが、「基」は、基本的なものの上に何かがかかることを暗示し、重なりをイメージできる。

1-1-2 五重塔

先に見た鳥居が、神社建築において、重なりを代表する建造物であるとする、仏教建築におけるそれは、間違いなく五重塔である。五重塔は、元来ストウーパと言われ、仏教の開祖、釈尊の遺骨を奉安するためのものであったが、建築美が完成したのは、この日本においてである。

重なりは、塔の五重の部分だけでなく、塔の上に添えられている相輪(そうりん)にも見られる。特に、宝輪は9つの輪が重なっている。⁵ (資料1参照)

更に、奈良市の東大寺は元来、七重塔が2基そびえていたし、奈良県桜井市の多武峰(と